



|                        |   |
|------------------------|---|
| Title                  | エゾオオカミをめぐる歴史と文化：日本における研究史およびオオカミ観形成過程の検討 [論文内容及び審査の要旨]  |
| Author(s)              | 梅木, 佳代  |
| Citation               | 北海道大学. 博士(文学) 甲第13710号  |
| Issue Date             | 2019-09-25  |
| Doc URL                | <a href="http://hdl.handle.net/2115/76328">http://hdl.handle.net/2115/76328</a>                         |
| Rights(URL)            | <a href="https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/">https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/</a> |
| Type                   | theses (doctoral - abstract and summary of review)  |
| Additional Information | There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.                              |
| File Information       | Kayo_Umeki_review.pdf (審査の要旨)   |



[Instructions for use](#)

# 学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 梅木 佳代

主査 教授 佐々木 亨  
審査委員 副査 教授 小田 博志  
副査 教授 池田 透

## 学位論文題名

エゾオオカミをめぐる歴史と文化：日本における研究史およびオオカミ観形成過程の検討

### 当該研究領域における本論文の研究成果

本論文は、日本のオオカミに関わる今後の議論・研究の進展に資することを最終的に目指した「人と動物の関係史」研究である。まず文献調査によって日本のオオカミの研究史を整理した。その後、北海道のエゾオオカミに関して過去の人々のオオカミ観について、既存資料を実証的に検証し、歴史的・文化的側面からその実態を明らかにした。

本論文の当該研究領域における研究成果は次の3つである。

1 つめの研究成果は、明治時代以降に発表されたオオカミに関する文献の記述内容を検討し、日本のオオカミの研究史を整理し、そこに2つの画期があることを明らかにしたことである。明治時代から1920年代は、主として日本のオオカミの名称と分類が検討された時期と位置づけた。1910年代から1920年代は、日本産「豺」を日本固有の動物であると明確に示そうとし、本州以南の「豺・山犬」を広義の「狼」から分離させ固有性を強調した。最初の画期は、オオカミの研究・情報収集を専門とする研究者が登場し、日本のオオカミの定義が確定した1930年代である。それまで「狼」は海外産の動物であり、日本産は「豺・山犬」と称するべきとされていたが、「ニホンオオカミ」に統一する方向に変わった。また、1990年代は1930年代と並ぶ2回目の画期となった。新たに「再導入」というテーマが加わったことにより、絶滅した日本のオオカミは近縁種を移植・再導入することによって再生し得る存在となり、研究が増加した。

2 つめの研究成果は、過去の北海道の人々のエゾオオカミ観について、歴史・文化面から実態を明らかにしたことである。従来、近世以前の北海道におけるエゾオオカミと和人との関係性は、本州以南と同様に親和的なものだったと推測されてきた。また、それを変化させたのは、明治時代以降に北海道に持ち込まれた家畜に対して甚大な被害を出したエゾオオカミであると理解されてきた。しかし、実際にはオオカミによる家畜被害は江戸時代から起きていたことが確認できた。また、家畜に対する被害だけでなく、開墾や道路の切り開きなどの場面で突然接近・接触したオオカミが、人に対して強い脅威や恐怖感をもたらしていたことも確認できた。北海道における和人とオオカミの関わりについては、害獣としてのオオカミの位置づけが中心であった。一方、アイヌにおいても、オオカミとの非親和的な関係性が存在することを突き止めた。口承文芸の内容を検討すると、オオカミは人を援助し力を与えてくれる神であると同時に、人と争い、危害を加える姿が伝承されていた。併せて、アイヌとオオカミの関わりに関する議論には、曖昧さや食い違っているように読み取れる部分がこれまでであった。更科源蔵の著作を確認すると、オオカミの狩猟を行うとする内容の聞き取り結果をアイヌから得ていたが、著作には反映せず、むしろ後年の著作からはアイヌがオオカミの狩猟に価値を見出していなかったと読みとれる記述があった。更科の著作はアイヌとオオカミの関わりを考える際に利用されることが多く、これまでの議論に影響を及ぼしてきた可能性がある。

3 つめの研究成果は、研究領域である「人と動物の関係史」において、オオカミ研究のあり方に対して提言を行ったことである。明治時代の北海道における有害鳥獣獲殺に関する制度の展開につ

いて、エゾオオカミのみの事例を参照しながら、本州でも同様の事態が起きていただろうとされた。また、北海道で御雇い外国人であるエドウィン・ダンがオオカミの駆除に毒薬ストリキニーネの使用を提言したことは広く知られるが、同様に日本全体で西欧的な技術のもと害獣として駆除する傾向があったとされてきた。しかしながら、日本のオオカミ全体の議論に反映させるのであれば、北海道の事例を受けて、本州側でも同様の事例があったことが検証されなければならないとし、これまでの人とオオカミの関係史研究のあり方を批判した。各地域における個別の実態を正確に把握した上で、日本全体の議論に反映させられる要素があるのかを検討すべきであると主張した。

以上の点から、本論文は十分な学問的成果を有すると認められる。しかし一方で、市町村史の記述内容を研究史に照らし相互補完的な議論にまで昇華していないこと。アイヌとオオカミの関係を分析するにあたり資料が限定的であったこと。また、オオカミを神獣／害獣のように2分法で捉えている点、文献調査のみで研究を進めることの限界などが指摘された。しかし、これらの課題を申請者はすでに認識しており、今後研究が進むことで解決できるものであり、本論文の成果を損なうものではないと判断した。

### 学位授与に関する委員会の所見

以上の審査の結果、審査委員会は全員一致して、本論文の著者である梅木佳代氏に博士(文学)の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。